

寄稿

中海宍道湖干拓淡水化データバンクの作成

徳岡 隆夫¹

Creation of a data repository centered on the reclamation and desalination projects of Lake Nakaumi and Lake Shinji.

Takao TOKUOKA¹

中海・宍道湖については、アジア太平洋戦争の敗戦後の日本の食糧不足を背景に大規模な国営干拓が計画され、八郎潟、河北潟について事業が実施されたが、その計画ではオランダ方式の干拓地の造成とともに両湖の淡水化が含まれていたことと、島根・鳥取両県にまたがる地域であったことから、さまざまな課題をかかえていたために、幾多の紆余曲折を経て2014年に“事業の完了”(4つの小規模干拓地の完成と、本庄工区干拓と淡水化事業の中止)となった。この経過をまとめると、

1期 1954～1967 本格準備から漁業補償の解決まで

2期 1968～1983 本格工事の開始から水理水質生態調査中間報告まで

3期 1984～1992 淡水化試行要請から反対運動の高揚まで

4期 1993～2002 再び本庄工区干陸提案から中止、さらに淡水化中止まで

5期 2003～2014 干拓淡水化事業の事後処理

に区分できる(徳岡による。現在進行中の松江市史通史編「近現代」に執筆中、2020年3月刊行予定)。

八郎潟と河北潟では干拓事業誌が出版されたが、国営中海土地改良事業では事業誌が作られずに現在に至っていることから、可能な範囲で関係資料を集め、データバンクとして残すことを目指した。なお、農水省は1993年に「中海干拓工事誌」を、島根県農林水産部は2014年に「国営中海土地改良事業の50年」を出版している。

このデータバンク作成のきっかけは、事業に直接かかわった伊達善夫先生の資料が島根大学汽水域研究センターに持ち込まれ、長くそのままになっていたが、これらを整理する必要性が生じたことである。この過程で、同じく事業に委員としてかかわった京都大学の川那部浩哉先生と長崎大学の東幹夫先生からも干拓事業関連資料の提供を受けることになったことから、徳岡の資料も併せて、データバンクを作成することにしたものである。その最終的な作成は平成25～27年にホシザキグリーン財団から認定NPO法人自然センターとして委託事業を受けることができたことで、ようやく完成に近づけることができた。写真1は資料がほぼ完成した際のもので、伊達先生に直接みていただ

¹ 島根大学名誉教授，元汽水域研究センター長・748-86 Nishikawatsu-cho, Matsue 690-0823, Japan.

くことができた（右隣りは清家泰島根大学名誉教授，当時は汽水域研究センター長，左隣は筆者，当時は認定 NPO 法人自然再生センター理事長）。その後，作成資料は同財団のご好意もあって，島根大学汽水域研究センター（現在はエスチュアリー研究センター）で，上記 4 名からの寄託資料として，保管していただくことになった（写真 2 島根大学清家研究室に保管中）。なお，これらの資料については，中海干拓淡水化事業の全体の流れの理解のためにファイル 1～3 を以下のように作成した（古いパンフレット類は伊達，川那部，東の各先生が残されていたものを利用させていただいた）。
ファイル①（前半） 蒐集文献リスト一覧を伊達，川那部，東，徳岡（その他の資料を含む）の順に作成
ファイル①（後半） およびファイル② 目で見える中海干拓淡水化事業の流れ（農林省・農水省，建設省・国交省，島根県などが発行したパンフレット類，報告書，新聞記事など
ファイル③ 事業中止後の事後処理，その後の出来事，および自然再生推進法にもとづく中海自然再生協議会発足にあたっての伊達善夫先生記念講演資料



写真 1 中海宍道湖干拓淡水化データバンク（2017 汽水域研究センターへ寄託）

これらの資料は 50 年続いた国家事業を振り返るには不十分なものである。今後，さらに資料の収集が進み，当センターを中心とした汽水域の環境修復と保全の活動に役立てていただくことを期待したい。以下に蒐集された資料について，筆者が“目玉”となる資料を抽出し，紹介する（以下の各項目末尾の数字は資料番号）。

謝 辞

長年にわたってご薫陶いただいた，いまは亡き伊達先生に感謝申し上げます。また，資料をご寄贈いただくとともに，学生時代からの長きにわたってご指導とご支援をいただいた川那部先生，畏友東幹夫長崎大学名誉教授にお礼申し上げます。



写真 2 データバンク完成を伊達善夫先生に報告（2016.3.19，認定 NPO 法人自然再生センター事務所にて。向かって右は清家泰島根大学名誉教授，当時の汽水域研究センター長と左は筆者）。

資料の紹介

伊達資料 (資料番号 1 ~ 191)

- ・末石富太郎 (1972) :「地域水需給からみた宍道湖水源の評価に関する研究調査報告書」。工業用水源利用可能性を島根県が委託したが、否定的見解がだされた。(7)
- ・干拓淡水化事業進めるための中間報告まとめに対する「助言者会議の水質・生物等についての見解」と、この見解に対する「農水省中海干拓事務所意見」などの資料。(90, 91)
- ・中海宍道湖淡水化阻止京大実行委員会 (1985) :京大学生が事業にかかわる専門家に直接意見を求めるなどの行動記録資料。(93)
- ・伊達善夫 (2011) :「宍道湖中海の干拓淡水化事業を振り返って—淡水化が中止になったいきさつ—」。伊達教授が事業にかかわった経過と淡水化問題の経緯を詳しく記述。(188)
- ・島根県農林部耕地課 (1969) :「中海干拓の歩み」。県職員桜木保による詳しい年表で、宍道湖漁協が補償金を受取り、1967 に事業実施となる経緯がまとめられている。(189)
- ・中間報告に関する建設省の質問と農水省の回答 (1 回目 78 項目, 2 回目 46 項目), 1984 : 水門締切による淡水化試行が提案された過程でなされた応答記録。(191)

川那部資料 (ほぼ年代順の配列で、中海 1 ~ 8 に区分して番号つけ)

- ・農水省中海干拓事務所による淡水化計画案と昭和 57 ~ 63 年度予算案(1982) :(委員会内部資料)。(1 - 13)
- ・佐藤仁志編著 (1985) :「宍道湖の自然」(宍道湖の自然シリーズ No.1), 山陰中央新報社, 178 p. 淡水湖化による変化予測について各分野の専門家が初めて記述。(2 - 4)
- ・沖野外輝夫・秋山 優ほか (1986) :「中間報告に対する助言者会議見解 (水質関係, 12 p 及び生物関係, 10 p)」。専門学者による討議で淡水化の負の問題点を指摘された。(3 - 7)
- ・中海干拓事務所及び各小委員会 (1986) :助言者会議見解に対する意見 (案) (3 - 21 ~ 32)

東 資料 (内容別に 4 つに区分し、番号付け)

- ・宮地伝三郎 (1962) :「中海干拓・淡水化事業に伴う魚族生態調査報告」 島根県が京都大学理学部生態学研究室に委託した事業の報告書, 226 p (1 - 1)
- ・中間報告 (1983) 以降に継続して実施された水質・プランクトン部会及び魚類・底生生物部会の調査報告書 (1990) (前者, 348 p, 後者, 105 p) :調査資料が蓄積され, 問題点がさらに明確にされた。(1-2, 20)
- ・島根大学農業問題研究会 (1983) :資料「淡水化をめぐる—ヤマトシジミはいきていた—」。干拓された八郎潟淡水湖でのヤマトシジミ生息から中海淡水化への問題提起。(2-5)
- ・農水省中海干拓事務所 (1983) :宍道湖中海淡水湖化に関連する水理水質及び生態の挙動について(中間報告, 正誤表付), 642 p, 及び同, 要旨, 61 p.) (3-2, 3)
- ・長崎大学教育学部卒業論文 (1886) :「八郎潟と宍道湖における底生生物群集の比較」, 東教授指導で行われたヤマトシジミについての調査報告。(4-2)

徳岡資料（島根県水試、京大、その他、徳岡1～90に区分）

- ・宮地伝三郎ほか（1945,1952,1954）：中海の底棲動物群集と遺骸群集，美保湾・中海の海況と生物群集．京大理動物教室等研究業績，31などの基礎資料．（京大4，5，6）
- ・農林省中海干拓事務所（1964）：中海干拓事業経過録，281 p：昭和36～38年の公式記録で，島根県立図書館蔵（桜木保氏が昭和46年に寄贈）．（その他1）
- ・鳥取県農林水産部耕地課（1990）：鳥取県側から見た中海干拓事業，442 p：淡水化試行延期と本庄工区凍結までの記録．（その他 2）
- ・岸岡 務（1975）：潟湖の汚濁—中海の生態学的長期研究—．（1）
- ・岸岡 務（1965）：中海と赤潮．米子市立弓ヶ浜中学科学部，206 p．岸岡先生がクラブ活動生徒とともに湖底の改変と深い窪地の存在を指摘．（2）
- ・徳岡隆夫・高安克己編（1992）：中海北部（本庄工区）アトラス，島根大山陰地域研究センター，92 p．湖底の地形改変状況とヘドロの分布を明らかにし，湖底状況図を作成（7）
- ・島根大学地域分析研究会編（1982）：「飢字の入海・中海とその干拓・淡水化をめぐる」，たたら書房，211 p．島根大の研究者による批判的解説書で，反対運動の指針を提供．（11）
- ・農業土木学会研究委員会（1992）：中海干拓堤防施工管理研究会報告書，193 p．大根島の淡水レンズの存在を示し，本庄干陸化に伴う消失と対処法の困難さを指摘した．（14）
- ・美しい中海を守る住民会議編（1997,1998）：「調べよう！みんなで中海」，117pと128 p．鳥取県側を中心とした住民組織の活動記録．（15,16）
- ・島根大学汽水域研究センター，特集「本庄水域と中海・宍道湖」，ラグナ，6，199 p．
- ・川那部浩也（1969）：「川と湖の魚たち」，中公新書，196 p．
- ・渋谷久典（2012）：「幻の中海干拓～「本庄工区」半世紀の軌跡」，234 p，本庄公民館．本庄出身の著者による地域住民からみた干拓事業の記録．（37）
- ・秋田県教育庁社会教育課編（1965）：「八郎潟の研究」，八郎潟総合学術調査会1010 p．（51）
- ・八郎潟干拓事務所編（1969）：「八郎潟干拓事業誌」，816 p．（52）
- ・農林省農地局（1954）：「日本の干拓に関する所見」（ヤンセンレポート）．島根県が干拓に確信を得たとする講演記録（中海干拓への言及はなし）（53）
- ・北陸農政局河北潟干拓建設事務所編（1986）：「河北潟干拓事業誌」，315 p．（58）
- ・池本甚四郎（1962）：「巨椋池干拓誌」，737 p．（59）
- ・徳岡隆夫編（1997）：「羽根湖の研究」，島根大学汽水域研究センター特別報告，68 p．戦中戦後にかけて実施された事業で，酸性硫酸塩土壌への対処法で貢献した記録．（61）